

芥川龍之介の作品を知ろう

あくたがわりゆうのすけ
芥川龍之介

[Akutagawa, Ryunosuke] 1892-03-15 ~ 1927-07-24

東大在学中に同人雑誌「新思潮」に発表した「鼻」を漱石が激賞し、文壇で活躍するようになる。王朝もの、近世初期のキリシタン文学、江戸時代の人物・事件、明治の文明開化期など、さまざまな時代の歴史的文献に題材をとり、スタイルや文体を使い分けたたくさんの短編小説を書いた。体力の衰えと「ぼんやりした不安」から自殺。その死は大正時代文学の終焉と重なっている。

作品集

「あおぞら文庫公開中の作品」

愛読書の印象 秋 芥川竜之介歌集 アグニの神 悪魔 浅草公園 或シナリオ 兄貴のような心持
—— 菊池寛氏の印象——あの頃の自分の事 あばばばば 鴉片 或阿呆の一生 或敵打の話 或旧友へ送る手記 或社会主義者 或日の大石内蔵助 或恋愛小説 闇中間答 案頭の書 飯田蛇笏 イズムと云ふ語の意味次第 一番気乗のする時 一夕話 伊東から 糸女覚え書 犬養君に就いて 犬と笛 芋粥 岩野泡鳴氏 魚河岸 馬の脚 海のほとり 運 永久に不愉快な二重生活 英雄の器 江口渙氏の事 槐 老いたる素戔鳴尊 往生絵巻 鸚鵡 ——大震覚え書の一つ—— 大川の水 ○君の新秋 尾形了齋覚え書 おぎん お時儀 おしの お富の貞操 鬼ごっこ お律と子等と 温泉だより 女 開化の良人 開化の殺人 貝殻 解嘲 蛙 格さんと食欲 ——最近の宇野浩二氏——

—— 影 片恋 かちかち山 学校友だち 河童 南瓜 神神の微笑 鴨胤 軽井沢で カルメン
彼 第二 枯野抄 彼の長所十八 ——南部修太郎氏の印象—— 寒山拾得 奇怪な再会 機関車
を見ながら 奇遇 「菊池寛全集」の序 煙管 木曾義仲論 着物 凶 「鏡花全集」目録開口 きりしとほろ上人伝 疑惑 金將軍 鵠沼雑記 首が落ちた話 久保田万太郎氏 久米正雄 ——倣久米正雄文体—— 久米正雄氏の事 蜘蛛の糸 芸術その他 戯作三昧 袈裟と盛遠 結婚難並びに恋愛難 「ケルトの薄明」より ↓イエイツ ウイリアム・バトラー(著者) 玄鶴山房 剛才人と柔才人と 好色 後世 校正後に 合理的、同時に多量の人間味 ——相互印象・菊池寛氏—— 黄粱夢 黒衣聖母 小杉未醒氏 古千屋 孤独地獄 子供の病氣 一游亭に 湖南の扇 近藤浩一路 氏 金春会の「隅田川」 西郷隆盛 西方の人 佐藤春夫氏 佐藤春夫氏の事 さまよえる猶太人 寒さ 猿 猿蟹合戦 三右衛門の罪 死後 地獄変 十本の針 島木赤彦氏 耳目記 霜夜 邪宗門 十円札 秋山凶 侏儒の言葉 「侏儒の言葉」の序 酒虫 出帆 じゅりあの・吉助 俊寛 將軍 小説の戯曲化 少年 虱 しるこ 白 蜃気楼 新緑の庭 塵労 素戔鳴尊 捨児 青年と死 仙人 仙人 葬儀記 早春 漱石山房の秋 漱石山房の冬 装幀に就いての私の意見 続西方の人 続芭蕉雑記 続文芸的な、余りに文芸的な 素描三題 大導師信輔の半生 第四の夫から 滝田哲太郎君 滝田哲太郎氏 竜村平蔵氏の芸術 谷崎潤一郎氏 たね子の憂鬱 煙草と悪魔 父 忠義 偷盗 樗牛の事 追憶 恒藤恭氏 手紙 出来上った人 ——室生犀星氏—— 伝吉の敵打ち 点鬼簿 東京に生れて 道祖問答 東洋の秋 都会で 杜子春 豊島与志雄氏の事 虎の話 トロッコ 長崎 長崎小品 夏目先生と滝田さん 南京の基督 廿年後之戦争 尼提 日光小品 女仙 女体 庭沼地 葱 鼠小僧次郎吉 年末の一日 野呂松人形 梅花に対する感情 このジャアナリズムの一篇を謹厳なる西川英次郎君に献ず歯車 芭蕉雑記 鼻 母 春 バルタザアル ↓フランスアナト

ール(著者) 春の心臓 ↓イエイツ ウイリアム・バトラー(著者) 春の日のさした往来をぶらぶら一人歩いてゐる 春の夜は 春の夜 **手巾** ピアノ 尾生の信 人及び芸術家としての薄田泣菫氏 薄田泣菫氏及び同令夫人に献ず 一塊の土 **雛 ひよつとこ** 平田先生の翻訳 不思議な島 二つの手紙 二人小町 舞踏会 文放古 冬 プロレタリア文学論 文学好きの家庭から 文芸鑑賞講座 文芸的な、余りに文芸的な 文章 報恩記 奉教人の死 ポーの片影 僕は 発句私見 本所両国 魔術 松江印象記 蜜柑 水の三日 三つの宝 三つのなぜ 三つの窓 妙な話 **Mensura**
Zoili 毛利先生 桃太郎 森先生 文部省の仮名遣改定案について 保吉の手帳から 藪の中 山鳴槍ヶ岳紀行 槍ヶ岳に登った記 悠々荘 誘惑 夢 百合 妖婆 横須賀小景 世之助の話 羅生門 羅生門 羅生門の後に 竜 るしへる 恋愛と夫婦愛とを混同しては不可ぬ 老年 六の宮の姫君 路上 **LOS CAPRICHOS** 露訳短篇集の序 わが俳諧修業 私の好きなロマンス中の女性
【青空文庫作業中の作品】

遺書 内田百閒氏 嚙語 「仮面」の人々 鑑定 教訓談 京都日記 孔雀 クラリモンド 講演軍記 江南游記 骨董羹 — 寿陵余子の仮名のもとに筆を執れる戯文 — 才一巧亦不二 鷺と鴛鴦 雑信一束 雑筆 沙羅の花 詩集 支那の画 「支那游記」自序 上海游記 蒐書 侏儒の言葉 商賈聖母 饒舌 小説作法十則 小説の読者 娼婦美と冒険 食物として 西洋画のやうな日本画 創作 続澄江堂雑記 続野人生計事 その頃の赤門生活 大正十二年九月一日の大震に際して 大導師信輔の半生 — 或精神的風景画 — 田端人 田端日記 近頃の幽霊 澄江堂雑記 長江游記 点心 東京小品 東西問答 動物園 偽者二題 日本の女 日本小説の支那訳 入社の際 沼 念仁波念遠入札帖 八宝飯 俳画展覧会を観て 売文問答 歯車 パステルの竜 はつきりした形をとるために微笑 一つの作が出来上るまで —— 「枯野抄」 —— 「奉教人の死」 —— 一人の無名作家 病

牀雑記 病中雑記 比呂志との問答 風変りな作品に就いて 拊掌談 二人の友 文章と言葉と 僻見 北京日記抄 変遷その他 僕の友だち二三人 本の事 翻訳小品 正岡子規 又一説? 亦一説? 窓 蜜柑 三つの指環 身のまはり 無題 野人生計事 藪の中 雪 世の中と女 リチャード・バートン訳「一千一夜物語」に就いて 臘梅 わが散文詩 わが家の古玩 忘れられぬ印象

1. 『つとむのつとむ』 <http://www.cnet-ta.ne.jp/p/pdlib/literature/akutagawa/hyotoko.txt> (大正三年十二月)
「ひよつとこ」の仮面とその虚実を探る。

芥川文学の構造分析 芥川文学の空間的構造

東京帝国大学在学中に発表した作品「ひよつとこ」は、冒頭「吾妻橋の欄干によつて、人が大ぜい立つてゐる。時々巡査が来て小言を云ふが、すぐ又元のやうに人山が出来てしまふ。皆、この橋の下を通る花見の船を見に、立つてゐるのである」と吾妻橋の欄干にたかる大勢の人々を描写するところから始まる。末尾はやや長くして「一眼見たのでは、誰でも之が、あの愛嬌のある、へうきんな、話のうまい、平吉だと思ふものはない。たゞ變らないのは、つんと口をとがらしながら、とぼけた顔を胴の間の赤毛布の上に仰向けて、靜に平吉の顔を見上げてゐる、さつきのひよつとこの面ばかりである」と結ぶ。

《気になることば》ばか【馬鹿】・【莫迦】の二表記を示す。

A 【馬鹿】「一囃子」。「一踊」と熟語化した固有語の表記に用いる。

○橋をくぐる前迄は、二挺三味線で、「梅にも春」か何かを弾いてゐたが、それがすむと、急に、ちやんざりを入れた**馬鹿囃子**が始まった。

○。「あらいらんよ、踊つてゐるからさ」と云ふ甲走つた女の聲も聞える——船の上では、ひよつと

この面をかぶった背の低い男が、吹流しの下で、馬鹿踊を踊つてゐるのである。

○馬鹿踊はまだ好い。花を引く。女を買ふ。どうかすると、こゝに書けもされないやうな事をする。

○今まではやしてゐた馬鹿囃子も、息のつまつたやうに、ぴたり止んでしまつた。

○唯、酔ふと、必、馬鹿踊をする癖があるが、之は當人に云はせると、昔、濱町の豊田の女將が、を習つた時分に稽古をしたので、その頃は、新橋でも芳町でも、お神樂が大流行だつたと云ふ事である。

○勿論、馬鹿踊を踊つたあとで、しらふになつてから、「昨夜は御盛でしたな」と云はれると、すっかり忘れてしまつて、「どうも酔はらふとだらしはありませんでね。何をどうしたんだか、今朝になつてみると、まるで夢のやうな始末で」と月竝な嘘を云つてゐるが、實は踊つたのも、眠てしまつたのも、未^{イイダ}にちゃんと覚えてゐる。

B 【莫迦】人を貶すときに発する語、くだらない意を示す語表記に用いる。

○中には「莫迦」と云ふ聲も聞える。

○唯、いゝ加減に、お神樂堂の上の莫迦のやうな身ぶりだとか、手つきだとかを、繰返してゐるのにすぎない。

○何故かと云ふと、平吉が後で考へて、莫迦々々しいと思ふ事は、大抵酔つた時にした事ばかりである。

○書かせられた平吉程莫迦をみたものはない。……

2. 『鼻』 http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/42_15228.html (大正五年一月)

冒頭「禅智内供の鼻と云えば、池の尾で知らない者はない。長さは五六寸あつて上唇の上から顎の下まで下つている。形は元も先も同じように太い。云わば細長い腸詰めのような物が、ぶらりと顔のまん中からぶら下つてゐるのである」と書き出す。主人公禅智内供は、なぜ、周囲の人たちから嘲笑されたのだろうか？その鼻を常人の鼻に変容させようと試み「鼻は依然として短い。内供はそこで、幾年にもなく、法華経書写の功を積んだ時のやうな、のびのびした気分になつた」とし、再び鼻は変容する。作品の結末は如何？……。末尾「——こうなれば、もう誰も晒うものはないにちがいない。内供は心の中でこう自分に囁いた。長い鼻をあげ方の秋風にぶらつかせながら」で終える。

古典仏教説話集『今昔物語集』を題材に『羅生門』を執筆。続いて発表した『鼻』が、文豪・夏目漱石から絶賛され、芥川龍之介は鮮やかな文壇デビューを飾つた。

3. 『芋粥』 http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/55_14824.html (大正五年八月)

冒頭「元慶の末か、仁和の始にあつた話であらう。どちらにしても時代はさして、この話に大事な役を、勤めてゐない。読者は唯、平安朝と云ふ、遠い昔が背景になつてゐると云ふ事を、知つてさへめてくれれば、よいのである。——その頃、摂政藤原基経に仕へてゐる侍の中に、某と云ふ五位があつた」と書き出す。この作品の原典とも云う古典仏教説話集『今昔物語集』との比較から、川自身が歴史文学を通じて真実書きたかつたことをみる。登場主人公の眞の自己とは……。

「風采の甚揚らない」赤鼻の五位。彼の人生最大の夢は、芋粥を飽きるまで食べることにだつた。「お望みなら、利仁がお飽かせ申さう」と、同僚の藤原利仁に誘われ、遙々越前の敦賀まで旅をするのだが……。夢の実現は幸福にあらず！。「見るとそれは一昨日、利仁が枯野の路で手捕りにした、あの阪本の野狐であつた。「狐も、芋粥が欲しさに、見参したさうな。男ども、しやつにも、物を食はせてつかはせ。」利仁の命令は、言下に行はれた。軒からとび下りた狐は、直に広庭で芋粥の馳走

に、与つたのである」と、一疋の獣の言動を眺めやることでその欲望を満たしてしまつた者が感じる心境をユーモラスに描き出す。著者の代表作である。

4. 『手巾』 http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/43_15268.html (大正五年九月)

冒頭「東京帝国法科大学教授、長谷川謹造先生は、ヴェランダの籐椅子(とういす)に腰をかけて、ストリントベルクの作劇術(ドラマトウリヤク)を読んでゐた」と書き出し、末尾「武士道と、さうしてその型(マニヤ)と——先生は、不快さうに二三度頭を振つて、それから又上眼を使ひながら、ちつと、秋草を描いた岐阜提灯の明い灯を眺め始めた。……」と結ぶ。旧五千円札の顔画像だった「新渡戸稲造」を諷刺する手法を学ぼう。主人公に読ませる書物を以て諷刺する芥川の理知的な諷刺学。

《気になることば》

○ふうばぎゆう【風馬牛】「先生は、由来、芸術——殊に演劇とは、風馬牛の間柄である。日本の芝居でさへ、この年まで何度と数へる程しか、見た事がない。——嘗(かつ)て或学生の書いた小説の中に、梅幸と云ふ名が、出て来た事がある。流石、博覧強記を以て自負してゐる先生にも、この名ばかりは何の事だかわからない」。

5. 『煙草と悪魔』 http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/163_15142.html (大正五年十月)

芥川の作家手腕を読み取る。

冒頭「煙草は、本来、日本になかつた植物である。では、何時頃、舶載されたかと云ふと、記録によつて、年代が一致しない。或は、慶長年間と書いてあつたり、或は天文年間と書いてあつたりする。が、慶長十年頃には、既に栽培が、諸方に行はれてゐたらしい。それが文禄年間になると、「きかぬ

ものたばこの法度(はつとせむ)に法度(はつとせむ)、玉のみこゑにげんたくの医者」と云ふ落首(らくしゆ)が出来た程、一般に喫煙が流行するやうになつた。——」と、日本に煙草を伝えたのがフランシス・ザヴィエルに同伴していた伊留満(宣教師)に化けた悪魔であつた、という設定で物語は始まる。暇つぶしに畑を耕し、煙草の草を育てた悪魔は、フランシスの教化を受けた牛飼いを騙し、賭けをする。「名前を当てることができたら、この紫色の花(煙草)を全てあげましょう。その代わり当てることができなかつたときは、あなたの体と魂を貰いますよ」。しかし、悪魔は牛飼いにうまく騙し返されてしまい、煙草は遍く牛飼いのものとなる。「牛飼いの救拔が、一面墮落を伴つていようように、悪魔の失敗も、一面成功を伴つていはしないだろうか。悪魔は、ころんでも、ただは起きない。誘惑に勝つたと思ふときにも、人間は存外、負けている事がありはしないだろうか」。芥川は、語り手を通じてこのような懐疑を提示する。「——記録は、大体ここまでしか、悪魔の消息を語つてゐない。唯、明治以後、再、渡来した彼の動静を知る事が出来ないのは、返へす返へすも、遺憾である。……」という一文で終わるが、悪魔は煙草の紫煙に身を変え、現代社会にまで生き延びている。

6. 『煙管』 http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/80_15183.html (大正五年十月)

自意識の悲喜劇とは如何。

冒頭「加州石川郡金沢城の城主、前田齊広は、参観中、江戸城の本丸へ登城する毎に、必ず愛用の煙管を持つて行つた。当時有名な煙管商、住吉屋七兵衛の手に成つた、金無垢地に、劍梅鉢の紋ちらしと云う、数寄を凝らした煙管である」。……「別儀でもございませぬが、その御手許にございませぬ御煙管を、手前、拝領致しとうございます」(三)。末尾「古老の伝える所によると、前田家では齊広以後、齊泰も、慶寧も、煙管は皆真鍮のものを用了たそうである、事によると、これは、金

無垢の煙管に懲りた斉広が、子孫に遺誡でも垂れた結果かも知れない」「八」。金無垢の煙管を愛用することによって、ある意味の虚栄心を満足させている加賀百万石の城主・前田斉広は、江戸城の坊主（同朋）・宗俊に惜しげもなく煙管をあげてしまう。これを機に次々と煙管を欲しがるようになった坊主たちに手を焼く斉広の家臣たちが考えた方策とは？。優越感や虚栄心なんてものは所詮、煙草の煙の如くなり。

7. 『MENSURA ZOILI』 http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/97_15251.html (大正五年十一月二十三日)

冒頭「僕は、船のサルーンのまん中に、テーブルをへだてて、妙な男と向いあっている。——待つてくれ給え」。「勿論です。殊に首府にあるゾイリア大学は、一国の学者の粹を抜いている点で、世界のどの大学にも負けないでしょう。現に、最近、教授連が考案した、**価値測定器**の如きは、近代の驚異だと云う評判です。もっとも、これは、ゾイリアで出るゾイリア日報のうけ売りですが」。「外国から輸入される書物や絵を、一々これにかけて見て、無価値な物は、絶対に輸入を禁止するためです。この頃では、日本、英吉利、独逸、奥ストリイ、フランス、露西亞、伊太利、西班牙、亜米利加、瑞典、諾威などから来る作品が、皆、一度はかけられるそうですが、どうも日本の物は、あまり成績がよくないようですよ。我々のひいき眼では、日本には相当な作家や画家がいそうに見えますがな。」架空の物語における文壇批判とは？

8. 『玄鶴山房』 http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/36_14975.html
龍門文庫藏・芥川龍之介自筆原稿 <http://mahoroba.lib.nara-wu.ac.jp/y05/y057/>

冒頭「…………それは小ぢんまりと出来上った、奥床しい門構えの家だった。尤もこの界限にはこう云う家も珍しくはなかった。が、「玄鶴山房」の額や塀越しに見える庭木などはどの家よりも数奇を凝らしていた」と始まる。「お芳が泊ってから一週間ほどの後、武夫は又文太郎と喧嘩をした。喧嘩は唯豚の尻尾は柿の蒂に似ているとか似ていないとか云うことから始まっていた。武夫は彼の勉強部屋の隅に、——玄関の隣の四畳半の隅にか細い文太郎を押しつけた上、さんざん打ったり蹴ったりした」「彼女は、ハリに住んでいるうちにだんだん烈しい**懐郷病**に落ちこみ、夫の友だちが帰朝するのを幸い、一しよに船へ乗りこむことにした。長い航海も彼女には存外苦痛ではないらしかった。しかし彼女は紀州沖へかかると、急になぜか興奮しはじめ、とうとう海へ身を投げてしまった。日本へ近づけば近づくほど、**懐郷病**も逆に昂ぶって来る、——甲野は静かに油っ手を拭き、腰ぬけのお鳥の嫉妬は勿論、彼女自身の嫉妬にもやはりこう云う神秘的な力が働いていることを考えたりしていた」「彼は時々唸り声の間に観音経を唱えて見たり、昔のはやり歌をうたつて見たりした。しかも「妙音観世音、梵音海潮音、勝彼世間音」を唱えた後、「かつぼれ、かつぼれ」をうたうことは滑稽にも彼には勿体ない気がした。「寝るが極楽。寝るが極楽……………」などの表現が見え、末尾は「彼の従弟は黙っていた。が、彼の想像は上総の或海岸の漁師町を描いていた。それからその漁師町に住まなければならぬお芳親子も。——彼は急に険しい顔をし、いつかさしはじめた日の光の中にもう一度リイプクネヒトを読みはじめた」とする。

◆ 電子本書店の「芥川龍之介」 <http://www.geocities.co.jp/Bookend-Ryunosuke/4608/akutagawa.html>

◆ みんなの知識【ちよつと便利帳】

◆ 作品に出てくる、国名・地名の漢字表記 <http://www.benicho.org/kanji/novel/a.html>

◆ 本郷美術骨董館 <http://www.hongou.jp/>